# スモン調査研究協議会研究報告書

No.1

昭和 44 年度疫学班研究報告

昭和 45 年 11 月

スモン調査研究協議会

# 目　　次

序 …… 1

昭和４４年度疫学班研究の要約 …… 3

ＳＭＯＮ患者全国実態調査成績 …… 4

岡山県湯原町におけるＳＭＯＮの疫学的研究　大平昌彦ほか …… 39

岡山県，特に頻発地　井原，湯原地区におけるＳＭＯＮの
　疫学的研究（第１０報）　緒方正名ほか …… 64

愛知県におけるＳＭＯＮの疫学的研究　青木国雄ほか …… 92

1. ＳＭＯＮ患者血縁者におけるＳＭＯＮ発生状況（第１報）
2. 職業別にみたＳＭＯＮ罹患状況（第１報）
3. ＳＭＯＮ患者と生活環境

秋田県におけるＳＭＯＮの疫学的研究　児玉栄一郎 …… 123

1. ＳＭＯＮ患者の疫学調査成績
2. ＳＭＯＮの病因論的考察

付 1.　スモン調査研究協議会規約 …… 161

付 2.　会議開催状況 …… 163

付 3.　スモン調査研究協議会名簿 …… 164

# 序

昭和３０年頃から山形県において故清野祐彦博士，三重県において高崎浩教授によって独立に慢性下痢経過中，下痢の知覚異常，筋力低下を起すところの従来みられない神経病の存在が気付かれ報告せられた。引続いて次第に同様の疾患の報告がふえ，昭和３７，３８年頃から飛躍的に数を増すに至った。とくに釧路市（伊東弓多果博士ら），山形市（清野祐彦博士ら），徳島市（日比野勝博士ら），大牟田市（黒岩義五郎博士ら），津市（高崎浩博士ら）における集団的発生が注意されるようになった。

この時点において"非特異性脳脊髄炎症"なる名称がこの新しい疾患に冠せられ，第６１回日本内科学会シンポジウム（楠井賢造教授司会）の主題となり，本症が新しい独立疾患であるか否かで論議された。"腹部症状を伴う脳脊髄炎症"なる病名が本症の特徴を表現する上で適当であるという点から，文献上しばしば用いられたが，同シンポジウムで椿忠雄博士らが，臨床ならびに神経病理学的見地から本症を Subacute Myelo Optico Neuropathy と名付け，その頭文字をとりＳＭＯＮと略称したのが便利であるためか，次第に多く用いられるようになり現在では半ば公式な病名となった。本書においてスモンを一応採用することとしている。

昭和４０年から２年間厚生科学研究費によって「腹部症状を伴う脳脊髄炎症の原因と治療の研究」として本症の研究が取上げられ，臨床と平行してはじめてウイルス学的研究が行われた。とくに昭和４１年に新宮正久，奥田邦雄博士らによりエコー２１型ウイルスが分離されたので，筆者らがこれを検討したが，結論を得るに至らなかった。筆者はこれに先立ち昭和３４年頃から，本症患者の糞便その他の検体よりウイルス分離を試みて来たが常に陰性の成績であった。

昭和４１年頃より岡山県井原市，湯原町において，従来にみない激しいスモンの流行が起り，社会的不安をすら醸すに至ったので，厚生省は昭和４４年度厚生科学特別研究費５００万円を以て"全国のスモン患者の実態ならびに病原に関する研究"を発足させた。その後８月に至って科学技術庁研究調整局より特別研究促進調整費約3000万円による「スモンの病因と治療に関する特別研究」が追加されることとなった。昭和４４年９月２日スモン調査研究協議会（以下協議会という）が結成され，その第１回総会を岡山において行い発足し，厚生科学特別研究費をも併せてスモンの病因と治療に関する研究が協議会に委託されるに至った。

協議会は疫学,病原,病理,臨床の4班からなり，班員は現在６４名でそれぞれの専門分野からスモンの病因ならびに治療の研究に鋭意取組んでいる。この間別記の如く会合を催し，研究成果を討議しつゝ研究を進めつゝある。研究の進展に伴い今後は協議会の研究成果を逐次出版してまとめて行く考えであるが，昭和４４年度において全国の疫学調査成績がまとまったので，これを中心に疫学班研究成績を研究成果刊行の第１集として世に送ることとなったものである。

こゝに今までの経過を略記し，序に代える次第である。

昭和４５年１１月

スモン調査研究協議会
会長　甲野礼作